●せいてん質問箱

「現在の利益」と「未来の利益」

●質問●

浄土真宗の教えは現実のこの私の問題であるはずなのに、『領解文』に〈後生の一大事〉と説かれているのはなぜですか？

□領解文の内容

ご質問にある『領解文』は、蓮如上人の作といわれ、古くより浄土真宗の正義が示されたものとして拝読されてきました。『領解文』の全体は四段に分れており、ご質問の「後生の一大事」という言葉はその第一段に、

もろもろの雑行雑修自力のこころをふりすてて、一心に阿弥陀如来、われらが今度の一大事の後生、御たすけ候へとたのみまうして候ふ　（一二二七頁）

とあるのをいわれているのでしょう。「後生」という言葉は、私たちが次の世に生れたときの、その一生涯を指しています。

『註釈版』ではこの『領解文』に文如宗主の文が付されています。そこには、「このごろその後生の一大事を軽忽し……」（一二二八頁）とあり、言葉の前後が入れ替わっていますが、「一大事の後生」とは、「とても重要である、次の世にどう生れるかということ」ということですし、「後生の一大事」とは、「次の世にどう生れるかということとても重要なこと」ということですから、それほどの違いはないと考えてよいと思われます。

また、その文如宗主の文には、「すみやかに一大事の往生を遂ぐべきものなり……」（同頁）とありますから、「後生」として大切なことは浄土に往生することだと示されているのです。

□往生という利益

浄土真宗では「御利益」という言葉をあまり用いませんが、それは「御利益」というと、普通は、何か病気が治ったり、お金が儲かったり、ということを意味するからだと思います。人の一生を仏教では「生老病死」というのですから、病気は私たちの命と切り離せないものであって、病が私から無くなってしまうことはないのですから、それを仏教で利益と説くはずはありません。また、お金が儲かるということも欲であり煩悩なのですから、むしろ利益とは反対のことというべきでしょう。

しかし、浄土真宗でも利益ということは説かれています。蓮如上人の『御文章』一帖第四通には、「正定と滅度とは一益とこころうべきか、また二益とこころうべきや。……されば二益なりとおもふべきものなり」（一〇八九頁）とあって、「正定」とは、ご信心をいただいた今、正定聚に住するということ、つまり、浄土に往生すべき身に定まることであり、「滅度」とは、浄土に往生したならそのままさとりに至ることであって、その二つが浄土真宗の利益だといわれているのです。

もちろんこの二つの利益はまったく関係のないものではありません。どちらも私たちの浄土往生にかかわることであるとお分りいただけると思います。ただ、一方は私たちが今現在受けている利益であり、もう一方は将来に受ける利益と心得て、それを混同しないようにといわれているのです。私たちは御信心をいただいたまさにそのとき、浄土に往生することが決定し、

それは決して失われることなく、やがてこの世の縁が尽きたなら、間違いなく浄土に往生させていただくということなのです。ですから、見方を変えれば、私たちは御信心をいただいたそのときから、この世の縁が尽きるまで、ずっと利益にあずかっているということになります。

□利益ということ

もとより、「利益」という言葉は仏教の言葉であり、「利益する」といえば、仏や菩薩などが人々に功徳を与えることをいいます。私たちからすれば、その功徳を得ることを「利益にあずかる」というのです。親鸞聖人もこの世での利益について、「現世利益和讃」には、さまざまなものが念仏の衆生を護ると示されていますし、また『教行信証』の信文類にも、

金剛の真心を獲得すれば、横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲。なにものか十とする。一つには冥衆護持の益、二つには至徳具足の益、三つには転悪成善の益、四つには諸仏護念の益、五つには諸仏称讃の益、六つには心光常護の益、七つには心多歓喜の益、八つには知恩報徳の益、九つには常行大悲の益、十には正定聚に入る益なり　（二五一頁）

と示されています。十番目の「正定聚に入る益」とあるのは、全体を総括するものといわれていますが、すなわち、御信心を得たものが如来に護られて、命を終えるときには間違いなく浄土に往生させていただく、それが利益だというのです。

□「後生の一大事」は今の問題

お釈迦さまが解決しようとされた問題が何であったかは、出家の動機を示す四門出遊のエピソードで知られるように、生老病死の問題、すなわち自らの命の問題でした。輪廻転生して迷いの生死を繰り返してきたけれども、その繋縛から今「解脱」した、それがお釈迦さまのさとりであり、それはまさにその繋縛の中にある今、解決すべき問題なのです。「後生の一大事」とは、お釈迦さまが解決しようとされた問題であり、今を生きている私たち自身の命の問題に他ならないのです。

□「現世利益」は間に合わない

三月十一日に東日本を襲った大震災は、あっという間に多くの命を奪っていきました。私の中では一九九五年の阪神大震災も忘れることができません。あらためて私たちは無常を生きているのだと思い知らされたことでした。夜寝れば明日が来ると思っている、それは錯覚なのだ、明日があるか無いかは本当は分らないのだ、いや、五分先、十分先すら分らない今を私たちは生きているのだ、私たちの今が無常なのだ、という事実を私たち一人一人が突きつけられたのです。明日があると思っているから、お金が儲かるように、健康でありますようにと、いわゆる現世利益を求めるのでしょうが、実はそうしたことが間に合わない今を、私たちは生きているのです。

テレビでは朝の番組によく占いのコーナーがあります。「六月生れの人は健康運が上昇しています」「今日は射手座の人がラッキーです」。三月十一日の朝にもおそらくそのような声が流れていたのでしょう。いかにそれが空しくて悲しいものであるかを私たちは思い知らされました。

如来の御本願のいわれを聞き、浄土に往生させていただくことを「後生の一大事」と受けとめるより他に、私の今を解決する道はないのです。

（本願寺派司教　安藤光慈）